

酪農家を楽にする

「牛のためのお産」

もし、あなたが牛だったら、どんなお産を望みますか？

株) 石井獣医サポートサービス代表
十勝子牛研究会会長

石井三都夫

私は横浜出身で大学も東京、子供のころから牛は見たことも触ったこともありません。長い間の臨床獣医時代も往診依頼があるのは異常なお産ばかり、それも、目の前のお産は異常なのかも判断できないまま、とりあえず、子牛の失位は整復し引っ張り出すのが仕事でした。そんな中、ある時からお産の様子は農家により違いがあり、難産や子宮捻転の多い農場、一方で、獣医へのお産の依頼がほとんどないのにお産の結果が良い農場があることに気が付きました。それからお産に対する興味がわき、一つ一つのお産をこだわりの視点で見えるようになりました。幸運にも、馬（重鞍馬）の多い診療所において長年勤めるうちに、馬の分娩に関しての研究も始めました。馬のお産は牛よりも早く、手を出すことなく多くの馬の自然分娩を目にすることができました。

臨床獣医から大学に転職し、大学においてはお産を研究テーマに選びましたが、国内はもちろん、世界中探しても、牛のお産の研究者が数少ないことは驚きでした。確かに、昼夜問わずいつ起こるか分からない分娩を研究対象にするのは、その成果を求められる研究者にとっては、相当の覚悟が必要なのでしょう。異常なお産の手引書はあるものの正常なお産との見極めやその見守りに関しては解説されている本は見当たりませんでした。以来、毎年、大型の農場に学生と泊まり込んで、数多くのお産を始めから終わりまでこだわりの視点で見て、子牛や親牛の様子からその結果との答え合わせをすることができました。私の経験は、失敗も含めすべて無駄ではないとは思いますが、漠然と年数だけを重ねた臨床経験の間、牛にはつらい思いをさせたことが多かったと今更ながら反省していません。

昨年正月、コロナ渦において人が集まることができなくなり、今まで楽しみにしていた各地での講演会や学会が中止となり、酪農家や関係者の皆様にお会いする機会がほとんどなくなりました。そんな中、残された時間を使ってどう生きようかと悩み考えておりました。今まで各地で何度となくお話ししてきました

お産の話ですが、まだまだ、伝え足りない部分がありました。より広く、たくさんの方々に発信したいと決意し、お世話になっているデイリージャパン社の編集長さんにご相談しましたところ、二つ返事でお産のお話について連載のご承諾をいただきました。そして昨年末、十勝子牛研究会事務局としてお世話になっていたゼノアック関係者の方から関東しゃくなげ会での講演依頼をいただきまして、講演内容については、「その連載中のお産のお話を中心に…」とのリクエストをいただきました。今回は、その連載中(次号で15回)のお話から、お産についてお産前の管理や環境から実際のお産の進行、異常産の見極めや対処方法など、時系列に沿ってお伝えしたいと考えています。

日々忙しい酪農家において、牛のお産管理の多くは「牛のため」ではなく、「人のため」に行われてきたように感じます。人が管理しやすいよう都合よく考えられ、様々な形や方法で行われてきた牛のお産管理を、牛が本来の自然動物として営まれる自然分娩をイメージしながら、それぞれのお産管理を牛目線で検証し改善していきましょう。牛が望むお産はどのようなお産か？その答えは、酪農家を楽にするに違いありません。

久しぶりに、多くの皆様の前でお話しできる機会をいただき、本当にうれしく思います。当日皆様にお会いできるのを楽しみにしています。コロナが再燃しないことを心よりお祈りしています。